

「あの子」問題から「教師 - 学習者」の関係について考える

つながろうねっト¹: 有森丈太郎 (トロント大学), 青山玲二郎 (香港城市大学専上学院),
佐野香織 (早稲田大学), 瀬尾匡輝 (香港理工大学),
山口悠希子 (香港大学專業進修学院), 米本和弘 (ブリティッシュコロンビア大学)

1. はじめに

つながろうねっトはオンラインの活動を中心に世界各地の日本語教師が集うコミュニティである。定期的で開催している勉強会では一方的に伝達される知識や教授技術を身につけるといった従来型の受動的な教師研修から脱却し、教師同士の対話を通して能動的に成長していくことを目指している。毎回、会場と各地域をインターネットで繋ぎ、様々なテーマについてディスカッションを行っているが、その模様を動画共有サービスで中継し、視聴のみの参加も可能にしている。

このような実践を行っているのは、私達が教師の成長を、他者との関係性の中での能動的な変容 (館岡他, 2012) と捉えており、教師が自らの経験を振り返り、自己理解を深めるための「語りの場」 (末吉, 2013) を創出することを重要視しているからである。

本企画はこの勉強会の場を研究集会大会のパネルセッションに移して行うものである。教師が学習者を「子」(「あの子」「今日発表した子」等) と呼ぶ行為を切り口に、普段の学習者に対する言動を意識化し、それらがどのような学習者観や教師と学習者の権力関係を構成しているのかを考える。発題者として特定の教育観を提案するのではなく、参加者が対話を通して教師の役割や自身の教育観を内省することで教師としての自己アイデンティティを構築する一助としたい。

2. 議論に至った経緯

本企画はメールマガジン「週刊『日本語教育』批評」(古屋憲章・佐藤貴仁発行)に掲

1 <https://sites.google.com/site/sekaitsunagaru/>

載された「『あの子』問題」²を読んだメンバー間の E メールでの意見交換に端を発している。記事では教師が成人の学習者を「あの子」と呼ぶ行為を取り上げ、日本語教育に内在するパターンリズム³、日本語を「教えてあげている」ことにアイデンティティを見出している教師の存在等をその背景として挙げている。

このメールマガジンの問題提起を受けて、9人のメンバーが E メールによる議論に参加し、2ヶ月間に渡って意見交換を行った。やりとりは学習者を「子」と呼ぶ行為に対するコメントに始まり、そのような教師の言動の背景となっているものの考察へと展開していった。

3. メンバーによる意見交換

メンバーのやりとりでは年齢的に「子ども」ではない学習者を「子」と呼ぶ言動に違和感を覚えるという意見が異口同音に語られた。学習者を「子」と呼ぶ行為の背景としては、主に1) 教師と学習者の力関係、2) 教師の「日本人性」と「学習者の母」としての振る舞い、3) 学習者との年齢差、の三点に関して意見が交わされた。

本節では、各メンバーの発言を上記の分類に応じて整理して提示し、パネルセッションにおける議論の材料としたい。尚、ここに掲載する発言は多岐に渡ったやりとりのうち、特に教師が学習者を「子」と呼ぶ行為に関する内容を抜き出し、本稿用に編集したものである。

3.1. 学習者を「子」と呼ぶことに対する違和感

メンバーA（発言#001）のメーリングリスト上での発言をきっかけに学習者を「子」と呼ぶ行為、特に「うちの子」という表現に対する違和感や抵抗感が述べられている。

発言#001 メンバーA 私の周りで「あの子」は聞きませんが、ときどき「うちの子」という人がいます。ちょっと年配の女性に多いような雰囲気です。そして「うちの子」という人は、いい意味でも悪い意味でも、お母さんのような態度で学生と接しているような気がします。

発言#002 メンバーB それ、すごくわかります。私は社会人学習者を教えていたので、周りの教師が学習者を指すときに「子」と使うのに違和感がありました。

2 <http://www.mag2.com/m/0001573661.html> (Vol. 1, 10, 13, 15)

3 父親的干渉／家父長的温情主義

発言#003 メンバーC 私の場合、「うちの子」っていうのには確かに違和感があります。子どもじゃないのに、っていうのもそうですが、「うち」って何？って思ったりします。同じく、自分のことを「先生は～」って言う先生も変な感じがします。

発言#004 メンバーD 「あの子」問題は、意外に根の深い問題ではないかと思っています。すでにみなさんがおっしゃっているように、私が特に引っかかるのは、「あの子」の「子」の部分です。

発言#012 メンバーB 「子」という言葉、教師以外の日常会話でも表れていると思います。ただ、その中でもやっぱり違和感があるのは、教師が「うちの子」って言うときです。別に学生、自分だけから日本語を習っているわけではないし（他の教師のクラスもあるし、もしかすると学校教育以外で、たとえばアニメなどを通して日本語を学習している可能性もあります）、なんか自分の持ち物のように言ってしまうのにすごく抵抗があります。

3.2. 学習者を「子」と呼ぶ行為に背景にあるもの

3.2.1. 教師と学習者の力関係と子ども扱い

学習者を「子」と呼ぶ教師は学習者を「弱者」「被庇護者」と捉えており、それに対して教師としての自身を「強者」「庇護者」と位置づけているのではないかという意見に対し、被植民者を女子どもとして扱う植民地主義との類似点が指摘された。

さらに「教える－教わる」という関係においては教える者が教わる者を「子ども扱い」しやすい状況になるのではないかという意見が交わされた。「教える－教わる」の関係が常に「強者－弱者」という権力関係に置き換えられるとは限らないが、教師の「母語話者性」や「知識を与える者」という立場が学習者を「弱者」の立場にしてしまう場合もあると考えられる。

発言#004 メンバーD 学習者を「子」と呼ぶ教師は、教師と学習者の関係を（おそらく無意識に）次のような関係として捉えているように思います。

・教師＝強者、庇護者 ・学習者＝弱者、（かわいそうな）被庇護者

また、学習者を「子」と呼ぶという行為そのものが上記のような関係を固定化しているようにも思います。学習者を「あの子」と呼ぶというのは、ごくありふれた行為かもしれませんが、そのありふれた行為を手がかりに日本語の教室というシステムが宿命的に内包するある種の差別の構造を描き出せるのではないかと考えています。

発言#006 メンバーG この問題は、外国語教育と植民地主義とのつながりの可能性を示しているとも考えられます。植民者が非植民者を女子供として扱ったということは、エドワード・サイードなどによっても指摘されています。以前マッカーサーが日本人は精神年齢が12歳と発言した事もその反映でしょう。日

本人も帝国主義下で被支配者をそのように見下していたでしょう。また母語話者の優位性も、植民地主義の中の植民者の優位性と重なるところがあると思います。自文化の押しつけも植民地主義的です。

発言#007 メンバーE 「あの子」ですが、#006 で植民地主義とのつながりを指摘されて、いろいろ考えていました。アジアにおける日本語教育では、学習者に経済的・政治的強者（日本）への同化を促している面があるという意味で、そのように捉えることも可能かもしれません。

「あの子」問題について家族に意見を聞いてみると、こうです。夫（教育分野からはかけ離れた人です）は、それはアジア的な文化だということです。彼によると中国語には「一日為師、終身為父」ということばがあり、「一日でも教師となって教えてくれた人は、生涯あなたの父である」という意味だそうです。昔は師弟関係を結ぶ場合、大事な知識や技術を授け、授かる者どうし、精神的に両者の間に親密な関係が生まれたとのこと。

発言#008 メンバーB #006 の「植民地主義的」考え方は強いのかなあと思ったりします。それは旧植民地という事実的なものだけではなく、力あるものが力のないものに与えるという力関係そのものなのかなあと思います。

発言#009 メンバーH #007 を読んで、日本語教師でなくても大学教員が「That kid」などと言っているのを聞いたことがあるなあ、と思って大学で教えているアメリカ人2人（いわゆる白人）に聞いてみました。言語以外のコースの教員でも「That kid」や「My kids」を使っている人はいるとのこと、大学教員が学生を「子ども扱い」するという行為は必ずしもアジア人や外国語教師に顕著なことではないかもしれません。ただ、言語教師は他の教科の教員と違って、全ての学生の名前と顔を覚えるのが基本でしょうし、授業の中で日々の生活や趣味など、個人的なことを話すことは多いので、そういった面では教師と学習者の距離が近くなりやすいでしょうね。それで学習者に対して子どもや弟、妹に接するのと似た気持ちが生えたり、学習者も同様の感情を抱くことで、その関係性における言語使用に他の教科の教師とは語用論的な違いが生まれることがあるのかもしれない。

発言#010 メンバーB 確かにそうですね。「教える－教わる」という構造そのものが、「子ども扱い」しやすくなることにつながっているのかもしれないですね。

日本語の場合だと、日本語力のみで「力関係」を得ようとしてしまっているところがないかと不安に思ってしまうかもしれません。そして、基礎の段階では「教師－学生」という立場は仕方がないのかもしれないですね。

ただ、日本語力のみだけに頼って「力」を得ようとするのは問題かなと思ってしまう。例えば、自分自身が今の職につけているのも、もしかすると自分が「日本語母語話者」だからだと感じるときは多々あります。でも、そこで、「じゃ、日本人だから」と考え、日本語母語話者性を売りにしていくのはよくないと思います。

発言#011 メンバーH 自分の中では「あの子」と呼ぶ行為と「子供扱い」とが必ずしも結びつかなくて、「教える」教わる」の関係が常に「強者」弱者」という権力関係に置き換えられるのか、例えば、地域日本語教育と、海外の、私が教えている文脈では教師と学習者の関係性も異なるのではないかと考えています。

発言#012 メンバーB #011 の「海外の、私が教えている文脈では」というところに少しビビッときました。自分のまわりでは、同じ海外でもどこか教師というだけで偉そうにふるまう人が多いような感じがしています。

個人的には「教師も学生と一緒に物事を考えることが大切だ」と考えています。その中で「権力関係」が H さんが言うように常にあるかというと思います。ですが、教師の中には踏ん反りかえって「知識を与えている」ようにふるまう教師を目の当たりにすることもあり、それで少しそれでいいのかなあと疑問に思うてしまうことがあります。

発言#013 メンバーH 「教える」教わる」の権力関係というもの、わからないではないんです。本来、学習者＝弱者ではないと思うんですが、教師や母語話者であることが絶対的な力となって、教師が言うことが正しいという状況ができ、学習者はそれに従うしかなかったり、日本語が覚束ないという理由で学習者を子ども扱いし、学習者を弱者にしてしまっているということはあると思います。論点がずれている、理解不足なのかもしれませんが、共生日本語についての論考などを読むと、「同化」という言葉が出てきます。同化というのはその人が本来持っていたものが別のもの（強者のもの）に置き換えられることで、それによってアイデンティティが失われるということかと思っています。日本において日本語を学ぶことは自分と社会をつなぐ手段を持つということですし、言語が壁となって発揮できなかったその人本来の能力を発揮できるようにもなるわけですね。なので、「教える」教わる」という関係は、弱者を強者にする過程とも言えるんじゃないかと思っています。

発言#014 メンバーB そうなんですよ。実は私もそのあたりモヤモヤとしていて、教育という性質上ある程度の“洗脳”は仕方がないのかなあと昨日もメールを書きながら思っていました。

発言#016 メンバーA 「教える」教わる」という関係は、弱者を強者にする過程とも言えるんじゃないかと思っています。（#013）ふむふむと思いましたが、学習者がどんなに頑張っても、（学校という制度の中では）教師を超えるほどにはなれないか、仮になれたとしても、すごく難しいと思いませんか。

発言#017 メンバーI 皆さんの文章を読んで、学校教育自体の問題が気になっています。歴史学の Philippe Ariès は「子供」という概念が 17 世紀以後の「学校教育」によって社会的に構築されたと考えています。Humanists が文化を生涯にわたって身につけることを目指した一方、Moralists は純粹だが混沌とした子供を教育する事に専念したと言っています。

私も教育機関で学習者に接しているので、Moralists の影響を受け学習者を純粹無垢な存在と捉えてきたかもしれません。特に教え始めた頃は現地の言葉が話せなかったのが、学習者の世界が全く見えないという決定的な問題があり、そのことも学習者を「子供」として捉えることに繋がったかもしれません。

3.2.2. 教師の「日本人性」と「学習者の母」としての振る舞い

日本人という理由で日本語を教えることになった教師（主に女性）にとって、「日本人性」は海外における自身の存在価値と直結しており、学習者の母のように振舞うことでその優位性を確保しているのではないか。また、それが学習者を「うちの子」という表現に現れているのではないか、という議論がなされた。

発言#001 メンバーA 私の周りで「あの子」は聞きませんが、ときどき「うちの子」という人がいます。ちょっと年配の女性に多いような雰囲気です。そして「うちの子」という人は、いい意味でも悪い意味でも、お母さんのような態度で学生と接しているような気がします。

もともと住んでいた人が日本人だからということで教え始めた...そんな日本語教育の歴史を持つ海外の地域が多いように思います。各地にそうやって日本語教育を立ち上げてきた母のような人がいます。やっぱり女性です。

発言#007 メンバーE #001 のお話からは現地に長く滞在する女性教師がこういう言い方をよくするという印象を受けました。そういった方々は現地では人種差別で苦々しい思いをされてきた方も多いのではないかと思います。そういう方々にとって、つきやすい仕事といえば日本語教師の職でしょうし（特に女性は）、自分の日本人性が売れる場でもあるでしょう。そのような場で自分の優位性を確保するために、彼女たちは学習者の「母」になるんじゃないでしょうか。「母」が「子供」に負かされることはありません。ある意味、「母」になることで、リベンジしている?? 「うちの子」なんて、私にはまさに「母」のボキャブラリーに思えます。

発言#008 メンバーB 「日本人性」のみに頼らないと、自分の存在価値を出せない教師、多い気がします。あくまで私のイメージですが、そういう先生方は、当時海外で日本語教師の人材不足から、日本人なら誰でもよかった時代になった日本語教師って、そういう感じがします。

発言#012 メンバーB 「うちの子」ということで、自分の思い通りに“育てたい”ということが表れているような気がします。今日たまたま自分が以前教えた学生の話了他の人に話している時に使ったのは、「前学期教えた学生」という言い方でした。自分自身の学生との接点はそれくらいですから、そんなに強く「うちの子」「うちの学生」と言えるほどではないなあとその時も書きながら思っていました。

3.2.3. 学習者との年齢差

教師と学生の関係に限らず、年齢差が「子」と呼ぶ行為に関係しているのではないかと、また学習者の年齢によって「子」と呼ぶときの意味合いに違いがあるのではないかという意見が出た。それに対し、教師が年上の学習者に対して「子」を使う場面に居合わせた経験が語られた。さらにネガティブな文脈で「あのおっさん」等の表現が使われることもあり、学習者を順応させる対象としてみている教師の態度が見て取れることが述べられた。

発言#015 メンバーH 社会人や大学生を相手にして、というのは私も想像しにくいですが、相手との年齢差もあると思います。自分が 50 ぐらいのサラリーマンの管理職で、相手が部下の新入社員とかだったらあるのかも。

発言#017 メンバーI 大学生になって「あの子」と呼ばれるのはやはり嫌かなと感じます。学習者がどう感じるかは年齢によって変化しそうなので高等教育と初等教育で全く違うと思います。それに義務教育の学校機関と私営の日本語学校でも違うかなと思います。義務教育では学校に来なくてはいけなくて来ています。そこで「あの子」とよばれる事と、自分で日本語を勉強しようと思ってきた場所で「あの子」とよばれるのでは意味合いが違うかもしれません。

また私のような 40 近い男性に「あの子」と呼ばれるのと年齢に近い女性の先生に「あの子」とよばれるのでも意味合いが違ってくると思います。発音は「あのこ」ですが「あの娘」という意味かもしれません。ジェンダー的な力関係も存在していると思います。もちろん年齢も重要そうです。教師が 30 歳で学習者が 60 歳の場合に教師が「あの子」と言うとは思えません。

発言#018 メンバーB 確かに年齢はありますね。でも、実際に、30 歳ではないですけども、40 代、50 代の先生が、50 代、60 代の学生に「あの子」と言っているのを聞いたことがあります。そして、さらにびっくりしたのは「あのおっさん、あのおばさん」というのも聞いたことがあります。

でも、そこで嫌だったのは、そのあとに続くのが大体「あの子（あのおっさん）にいくら教えても頭の中に入らない」ということば…。

なんかこの関係性は明らかに自分より年上の人に、「知識を詰め込み」、自分に順応させようとしている姿があるように感じますし、実はそれがかなり嫌でした。

これは、H さんがいう「あの子」とはかなりニュアンスが違うような気がします…。でも、「あの子」という言葉よりは、教師の態度に私は嫌な気持ちになっているのかもしれないです。

4. 本パネルセッションで参加者と議論したいこと

以上、学習者を「子」と呼ぶ行為の背景にある要因についてのメンバー間の意見交換を

紹介した。本稿には掲載できなかったが、実際のやりとりではこの問題から派生して教室運営に関わる「躰」などについても話し合われた。このような協働を通して、普段漠然と抱いている違和感や、自身を含む教師の何気ない言動を意識化し、掘り下げて考えることは日々学習者と向き合う教師の成長にとって有意義なことであろう。本セッションではこの「あの子」問題を切り口に、参加者と共に「教師-学習者」の関係についてさらに議論を深めたい。

当日のディスカッションをより深く活発なものにするために、参加者には事前につながろうねットのウェブサイト⁴上でこの問題をめぐるメンバーの意見交換を読んだ上、自身の学習者に関する言動や認識についてのアンケートにも協力してもらおう。これにより身近な問題の多面的な議論を実現したい。

参考文献

- 末吉朋美 (2013) 「日本語学校で働く教師たちとのナラティブ的探究—教師の悩みからわかること」大阪大学大学院文学研究科博士論文 (未公刊).
- 館岡洋子他 (2012) 「日本語教師の成長を支えるものは何か」『日本語教育国際研究大会名古屋 2012 予稿集』第 2 分冊, 24-25.

4 <https://sites.google.com/site/sekaitusunagaru/benkyokai9>